

### 3/10「飯舘村からの挑戦」を読んで

本書は、原子物理学者で、全共闘運動のリーダー、日本のIT産業のリーダーでもある田尾陽一さんが、同志の方々と大震災直後から飯舘村の現地に入って、村民の方々と共に地域の再生に取り組んできた記録です。ちょうど飯舘村産のお米が届いたところで、基準をクリアして美味しいお米を作り、販売できるようになったこと自身がその活動の成果です。前から書こうとして至らなかった書評に取り組んでみます。内容は、10年という年月と、触れられている領域の広さからいって、簡単に論じられるものでなく、実物を読んでいただくのが一番なのですが、私なりに思うことを書かせていただきます。10年後の総括という気持ちで、いささか長文になりますが、ご勘弁を。

いわきで3年働き、暮らした私にとって、今回の大震災と、原発事故災害は、お世話になった地域の一大事、色々お手伝いできることはないかと思っていた矢先、旧知の田尾さんや、都市工学科の先輩の大永さんたちが、飯舘村の再生支援活動を始めると聞き、参加することとしました。お二人のお仲間が中心なので、私よりは少し先輩の方、それも、それぞれの分野で立派なお仕事をされているインテリの方々が、近代科学・技術の産んだ大災害に対して、科学と技術を使って、汚染の現状を解析し、日本で一番美しい村といわれた元の姿に戻そうという、ある意味、全共闘運動の問題意識の原点に戻っての思いのようなものを感じました。といってもその後の50年近い年月を経て、皆さんベテラン、田尾さん自身は実業家としても成功した方でもあり、事業としてのマネジメントをしっかりとされていることは、流石です。現役時代に浜松などでお世話になった元経産省幹部でスズキ常務だった横田さんがメンバーだったのには、ちょっとビックリしました。現地での活動に必要な自動車を提供してくださったり、お人柄を感じたものでした。

いわば他所者の東京のインテリをしっかりと受け止めて下さったのは、飯舘村の農業のリーダーの菅野宗夫さん、田んぼ、畑、森の生態や農業、畜産についての知識は半端ではなく、原子物理学やITという近代科学技術の先端を走ってきた田尾さんたちとの、議論のやりとりは興味深いものでした。特に、汚染土壌を少しでもきれいにするため、表層土をひっくり返す天地返しというやり方や田車を使った代掻きなどの提案・検討(147頁)は当たり前といえば当たり前ですが理にかなっていて、風土についての知識は凄いものだと感心したものでした。長く地域づくりに関わってきた身からすると、地域に根ざして活動するというのは難しいこと、非常事態とはいえ、菅野さんのお宅を拠点として使わせていただき、家族同様のお付き合いで、再生の活動を続けられたのもさすがです。

ゴールの「地域を主役に」「自然との共生を目指して」「自然とともに暮らす新しい生き方」・・・については、120%異議なし、このところ足が遠のいているのですが、コロナ禍が落ち着いたなら、お手伝いできればと思っています。

現代社会との関係で、一番関心があるのは、そもそも原発、原発事故、その後の処理を一番の専門家として、どう捉えてこられたかということです。原発そのものについては、トイレのない家を作るようなものということを普段から言われているので分かるのですが、私自身処理(廃炉)事業に関わってきた身からすると、特に事故以来の対応につ

いての原子力村(?)の動きが興味深いところです。与謝野経産大臣や島田秘書官(経産省、その後東電で廃炉等について担当、事務次官)の動きについての記述は(38ページ)その後の動きからみて、成る程でした。一番ハッとしたのが、爆発一月後の2011年4月20日に母校の旧原子力工学科に行ったら、彼らの産んだ成果がこの始末にも関わらずひっそりとして、学生も我関せず、「異星人の大学にでもきたという気がした」というくだり(43頁)、解体を叫んだ方の言葉としても興味深いですが、日本のアカデミズムの現況を象徴しているように思えます。菅総理の学術会議についての見方は、個別の任命拒否のことと別に、あながち外れていないかもしれません。

それよりも、一度田尾さんの話を聞いてみたいのが、原子力について、理論(原子物理学)と工学(エンジニアリング)の関係。原子物理学の治験をもとにエンジニアリングで、製品ができるという関係のなかでその極端の成果の原爆は今も実在しても使うのは明らかに×(のはず)、原発も今回の事故と被害を見ると、(私の見解は、他の代替手段もあるので)×ということですが、それでも原子物理学の研究は必要なのか、エンジニアリングにより人類、社会に役立つものが出てくるのかについての見解、見通し如何!? というのは、岩手県、宮城県が推進しているILC(国際リニアコライダー)プロジェクトを私もお手伝いしているところだからです。コロナ禍もあり、やや動きが静かになっていて、改めて確認してみたいと思うところです。国の側での最初の提唱者が与謝野さんであり、現在推進の中心にいる山下了先生もこの飯館村再生に関わり本書にも登場している(37頁)こともあり、日本が原子力とどう付き合うかについて、ビジネス面含め、現場からの、菅総理の学術会議についての言葉を借りれば総合的、俯瞰的な見解が得られると思うのです。

最後に、私が前のFB記事(日々の新聞に掲載したもの)で書いた、廃炉事業について、元国防省の人が、「私たちは原発事故に備えマニュアルを整備している、これをもとに福島事故時の日本政府に協力を申し入れたが、断られた」と話したのに対し、「マニュアル通りにやれば収まる事故ではないと思うよ」というやりとりが記述されています(224頁)、米国はスリーマイル島原発事故の処理を経験し、今回の私たちのパートナーは、原子力潜水艦の廃炉処理の専門家の軍人で、文字通り常在戦場の現場経験豊富な技術者、マニュアル通りにやれば収まるわけではないにしても、マニュアルすらないのが日本の現況で、それにどう対応するか大変ご苦労された実質責任者が前述の嶋田さんだったことを考えると、その時の田尾さんとの議論がどんなものだったかは是非お聞きしてみたいところです。

ともあれ、こうして、大勢の人と組織をまとめ上げ、ここまで引っ張り成果を出してきた著者の田尾さんとカウンターパートの菅野宗夫さんのリーダーシップに改めて敬意を表します。皆さんもぜひご一読を、そして飯館村にお出かけください

小林一